

谷崎潤一郎「蘇州紀行」論

——「景色」のなかの「私」——

河野龍也

一

一九二〇年前後の日本では、中国旅行が一つのブームになり、文学者による紀行文が注目を集めた。主な人物では、徳富蘇峰が一九一七（大正六）年九月から一二月まで北京・漢口・九江・廬山・南京・揚州・上海・蘇州・泰山・濟南・青島を遍歴して『支那漫遊記』（一九一八・六、民友社）を書き、谷崎潤一郎が一九一八（大正七）年一〇月から一二月まで北京から上海・蘇州まで蘇峰とほぼ同じルートを辿って「蘇州紀行」（『中央公論』一九一九・二―三。後半は原題「画舫記」）、「秦淮の夜」（『中外』一九一九・二、『新小説』一九一九・三。後半は原題「南京奇望街」）、「西湖の月」（原題「青磁色の女」）『改造』一九一九・六、「廬山日記」（原題

「廬山日誌」『中央公論』一九二一・九）などを書いた。また、佐藤春夫は一九二〇（大正九）年七月から一〇月にかけての台湾滞在中に厦門・漳州に渡って『南方紀行』（一九二二・四、新潮社）を書き、芥川龍之介は一九二一（大正一〇）年三月から七月まで、上海から谷崎とは逆ルートを通りながら長沙方面の見聞も加えて帰国後に『支那遊記』（一九二五・一一、改造社）をまとめている。

このような旅行ブームの背景には、一九二〇年代までに大陸周遊のための交通手段が確立されたことが挙げられる。下関・釜山直通の関釜連絡船から京釜線・京義線・安奉線・京奉線を乗り継げば、天津・北京までは鉄道で結ばれていた。南北の幹線には天津浦口間の津浦線と北京漢口間の京漢線があり、漢口から上海へは揚子江の汽船で出ら

れる。ここまで来れば、長崎・門司を經由して神戸・横浜に至る定期航路で日本に戻ることができた。

この周遊ルートの完成にともなって、日本政府からは欧米向けの英文旅行案内書『An Official Guide to Eastern Asia vol.4 China』（一九一五・四、鉄道院編・刊）が出版され、さらにその邦文版『朝鮮満洲支那案内』（一九一九・一〇、鉄道院編、丁未出版社刊）も刊行された。これらの案内書は、写真入りで中国各都市の沿革と現況、旅館、施設、名所旧跡を説明するほか、主要都市には多色刷りの地図が附属しており、読者は中国旅行を具体的にイメージしながら観光予定を組むことができた。また、旅行中も携帯しやすい小型サイズで実用性が高く、日本の海外ツーリズム黎明期の記念碑的なガイドブックとなったのである。

谷崎潤一郎もまた、鉄道院刊行のガイドブックの恩恵を受けた一人である。現地日本人による杜撰な名所案内に業を煮やした谷崎は、「以後絶対に案内者を信用しない事にきめた」と宣言し、「案内者はただ通弁をさせるに止めて、飽くまでも鉄道院のガイドブックと地図とに拠つて自分の勝手に歩き廻る事にした」と書いている（『蘇州紀行』）。谷崎の旅行は日本語版刊行前のことで、彼が携帯したのは英文旅行案内であったことになる。実際、名所の説明だけなら

下手な案内人よりもガイドブックの方がよほど正確で詳細な知識を与えてくれるのは、谷崎が言うとおりであろう。

だが、この発言は同時に、現地日本人への憤懣を通り越して、紀行文という個人体験記への本質的な問いかけをも含んでいる。すなわち、ガイドブックで旅先の知識が十分得られるならば、紀行文が読者に提供できるものとは一体何だろうか。恐らく、多くの紀行文作家がこの問いに向き合っている。本稿では「蘇州紀行」を例にとり、完備した案内書を手にした谷崎が、この問いにどう答えたかを考えてみたい。

二

一九一八年一〇月九日に東京を出発した谷崎は、朝鮮半島から奉天・山海関・北京・漢口・九江・廬山・南京を経て一月二二日の夕方に蘇州に到着した。そこで一月二五日までの四日間を過ごして上海へと向かっている（『蘇州紀行』の日付は一〇月と誤っている）。

第一日目は蘇州停車場から城外西側を大回りして、日没後、盤門外の日本租界に到着。谷崎は旅館の接客に不満を抱き、かなり辛辣な言葉を作中に連ねている。蘇州の日本

旅館は数が限られていたから、宿の名を伏せてあつても後続の旅行者にはどの宿の評判であるかが筒抜けであつた。それでも構わないという考えなのだから、よほど大きな反感を抱いたことは察するに難くない。上海に本店があると、言う女将の言葉からも、谷崎が泊まつたのは月廻家旅館（後の繁廼家）¹であつたことが分かる。反感の由来は実は単純ではなく、後で改めて検討する。

第二日目は驢馬に乗つて城内を見物。孔子廟・滄浪亭・凹妙観・北寺塔と見たあと、閩門外に至つて留園・西園・虎丘・寒山寺を参観。この日の見物で蘇州の（運河の景色があまり気に入つた）谷崎は、第三日目には水郷の風情をさらに堪能するためわざわざ画舫を雇い、水路を辿つて天平山の紅葉見物に出かけた。画舫とは中国で宴会用の屋形船を指し、転じて広く遊覧船を意味する言葉でもある。谷崎がここで言うのは後者の意味である。

谷崎は蘇州の遊覧体験を二回連載で発表するにあたり、前半のタイトル「蘇州紀行」を後半では「画舫記」に改めて書き継いでいるが、この事実を示される通り、作品の内容はこの第三日目の体験を口述筆記でまとめたもので、第一目と第二日目の行程については、前文のなかに簡単な要約として添えられているに過ぎない。だが、谷崎がいかに

なる観点から蘇州を描こうとしたのかはこの前文を見ると非常によく分かる。例えば、二日目の城内見学は次のように説明されている。

第二日目には、驢馬に乗つて呉門橋を渡り、盤門を潜つて始めて蘇州の城内に這入つた。孔子廟から滄浪亭のほとりを過ぎて護龍街を真直ぐに飲馬橋を渡り、樂橋を渡り、觀前大街の繁昌を見て陶器商や宝石商の店を冷やかす、凹妙観に詣でて再び護龍街に戻り、禪興寺橋、装家橋、香花橋を渡つて、橋畔の北寺の塔を見物した後、寺の前を左折して桃花塢大街に出て、草家橋を越えて堀割りに沿ひつ、四義橋の袂から、城壁の内側に附いて左へ曲り、水関橋を渡つてやつと城外なる閩門のほとりの吊橋に到つた。（傍点河野）

注目したいのは、この短い文章のなかに何と十基もの橋の名が鏤められていることである。世に「呉門三百九十橋」と言われる蘇州にあつて、巨大な呉門橋を除けば特に名所とは言えないありふれた町中の橋を、孔子廟・滄浪亭・凹妙観・北寺塔などの名だたる旧跡と同列に並べているのである。このことは、街路と水路の無数の交点に、民家

の屋根よりも高い石のアーチが林立する水都の光景——それらのアーチ橋の階段を昇降するために、いかなる車も役に立たず、交通手段は驢馬や駕籠に頼るだけであった当時の蘇州の基本的な街景を印象づけるのに大きな効果を上げている。

そしてまた、橋名の羅列の裏にあるのは町の暮らしそのものに対する関心である。古い景勝地の蘇州にあつて、漢字による名づけや見立ては名所だけにとどまるものではなかった。それは目を凝らせば極めて微細な街の一隅にまで及んでいるという驚くべき事実を、谷崎は見逃さなかつた。異郷を素通りする一介の旅人でありながら、住人にとつては親しみ深い生活空間であるところの都市の姿を、まさに住民の視点で味わつてみたいと身もだえる異国の作家の貪欲な願いがそこにはある。この願いから来る細部への着目の有無こそが、名所旧跡の解説に終始するガイドブックと、谷崎の紀行文とを決定的に分かつものなのである。

実際問題として、鉄道院の案内書を参考にするだけでは、上記の文章は絶対に書けない。野崎歓は、『朝鮮満洲支那案内』に添えられた多色刷りの蘇州地図がいかにかみしいかを説き、谷崎が中国に取材して書く作品の舞台は、どれも『支那案内』中この「挿図及刷込図版」によつて詳しく

紹介され、かつまた写真で飾られているスポットばかりだ」と指摘しているが、鉄道院のガイドブックに収録された折り込み地図には、個々の橋の名は全く記されていない。そもそも、一九一八（大正七）年に中国を旅した谷崎が、翌年発行の邦文版を携行できるはずはなく、谷崎が参照したのは一九一五（大正四）年刊行の英文版であつたが（中公文庫版で訂正）、そちらにしても事情は同様である（図1）。小縮尺のコンパクトな地図に、観光名所でもない橋の名を一々書き込むことは、スペースの都合から不可能であつたことは分かる。重要なのは、一般旅行者に無用の情報としてガイドブックが捨てたものを、谷崎がわざわざ拾い上げているということなのである。

それでは、谷崎は一体どうやってガイドブックにもない橋の名を補つたのだらうか。まさか橋を渡ろうとするたびに驢馬の背から降りて名前を確かめノートに記していったわけではあるまい。それよりも（鉄道院のガイドブックと地図とに拠つて自分の勝手に歩き廻る事にした）と谷崎が述べているのがヒントになる。これは地図入りのガイドブックという意味ではなく、（鉄道院のガイドブック）と（地図）の二種類の道具を持つて歩き廻つたと理解すべきだらう。谷崎はおそらく、鉄道院の英文ガイドとは別に、現地

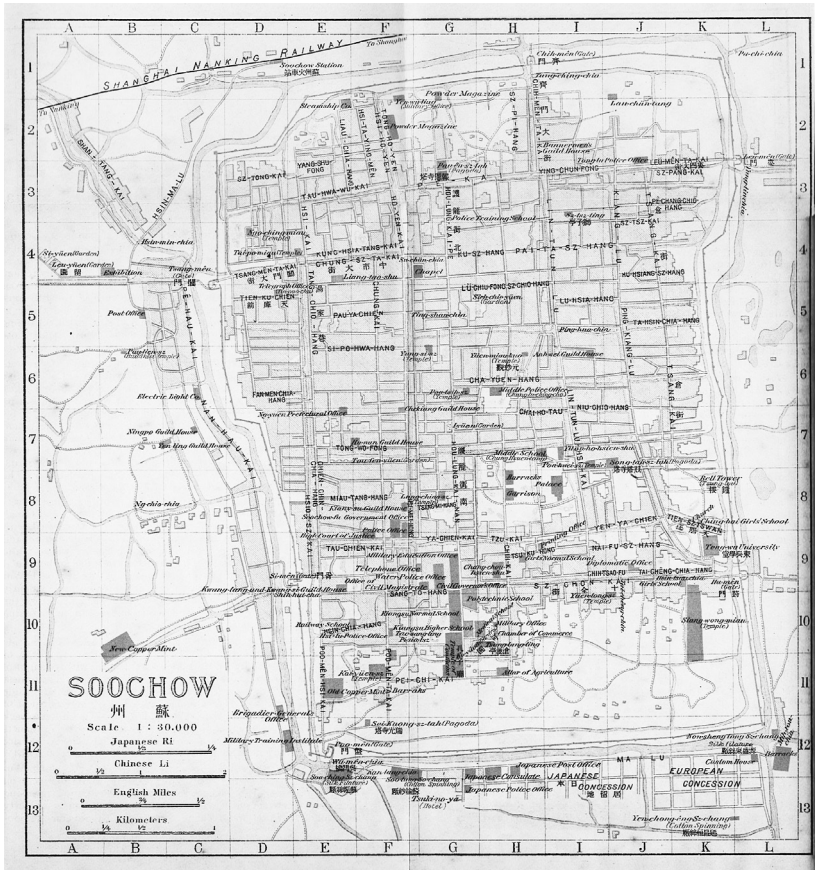


図1 『An Official Guide to Eastern Asia vol.4 China』(1915.4、鉄道院)に附属する蘇州地図。城外の呉門橋以外に街中の橋の名は全く書かれていない。20×18cm。1：30000。

で詳細な蘇州地図を手に入れたのである。紀行文を口述筆記でまとめる際にも、その地図を取り出して見直し、当日の参観経路に沿って小さな文字で書かれた橋の名を一つ一つ拾い上げて行ったに違いない。

現存する古い蘇州地図のなかで、谷崎が参考にした可能性のある地図は、「新測蘇州城廂明細全圖」(一九一四・四、蘇州圖書總匯處)であろう(図2)。ここには蘇州のあらゆる橋の名が網羅されている。桃花塢大街の「単家橋」を谷崎が「草家橋」に誤っているのもこの地図を見れば納得することができる。毛筆の「單」の字に癖があり、一見するとそれは「草」の字と形が極め

Folder 2-A

新測蘇州城廂明細全圖

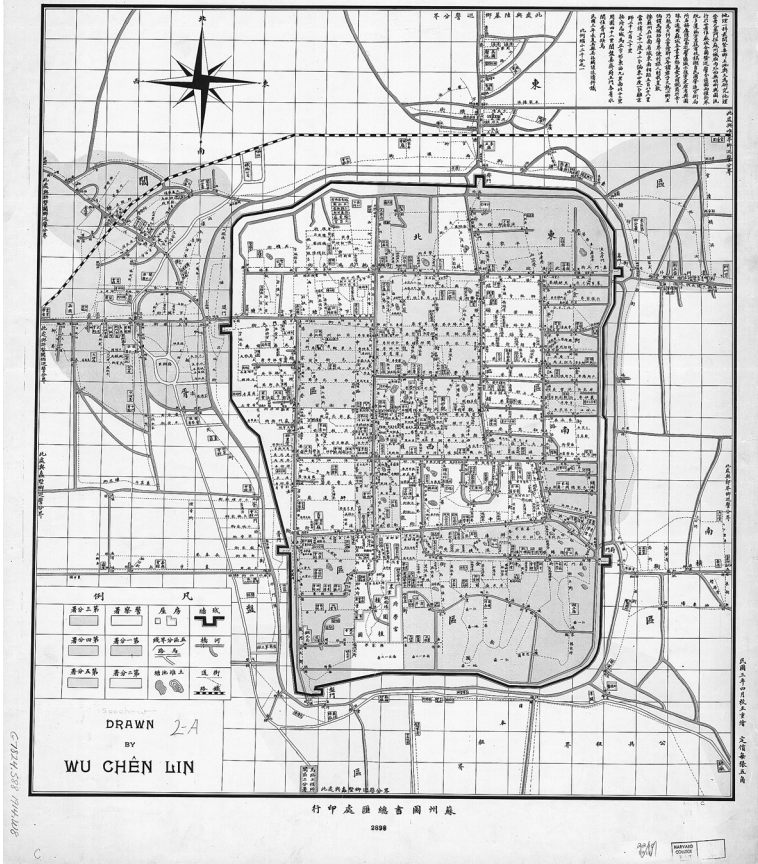


図2 「新測蘇州城廂明細全圖」(1914.4、蘇州圖書總匯處、ハーバード大学図書館蔵)。路地と橋が詳細に記載されている。65×59cm。1：2000。

てよく似ているのである(図3)。旅行中の自筆メモを参照したのであればこのような間違いはまず起こるはずがない。「蘇州紀行」は見かけ上、いかにも気楽に語られた紀行談を装ってはいるのだが、実際のところは勤勉な事後検証に基づいて組み立てられた叙述であったことが理解できるのである。

作中の地名が地図に準拠することを示すもう一つの例がある。市街中心部にある道教の名刹を、谷崎は「円妙観」と書いている。ここは元代に「玄妙観」とされたが、清代に康熙帝の諱(玄燁)

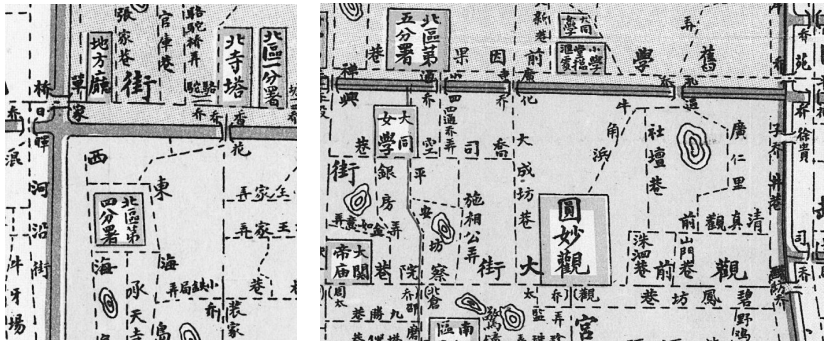


図3 「新測蘇州城廂明細全圖」の部分拡大。左図は、装家橋・香花橋・北寺塔・單家橋の附近。谷崎は毛筆の「單」を「草」に読み違えたらしい。右図は、観前大街と「円妙観」の附近。「元妙観」とは書かれていない。

を避けて「円妙観」と改称された経緯があり、「新測蘇州城廂明細全圖」にはもちろん「圓妙観」と記されている(図3)。民国初期の日本人の旅行記では「玄妙観」を使っているものが多いが、鉄道院の英文ガイドでは「元妙観」、これをのちの邦文版で「玄妙観」に改めている。つまり谷崎の「蘇州紀行」に

は、ガイドブックと現地入手の地図の両方の資料から地理情報が取り入れられていたことになる。名所旧跡の説明にはガイドブックの記述を尊重しているが、より重要なのは、谷崎がそれだけでは満足できなかったということなのだ。彼は別に大型の彩色地図を持ち出してきて目の前に広げ、蟻の子のように散らばっている文字の群れのなかに視線を泳がせてみなければ、気が済まなかったのである。

谷崎には恐らく、橋の名にこそ水都の風雅と歴史の粋が凝縮されているという確信があったのに違いない。初期の短篇「秘密」(『中央公論』一九二一・一一)にも、橋の名が数多く登場してくる。女に目隠しをされたまま東京の町じゅうを連れまわされた男が、最後に女の家のありかを探し当てることに成功したのは、下町の掘割を渡るたびに感じた水の気配に導かれたからであった。日本橋人形町出身のこの主人公にとって、それらの橋や掘割の名は、幼少期に親しんだ懐かしい生活空間を彩るかけがえのない記憶のアクセサリーだった。

繰り返すなら、「蘇州紀行」は口述筆記とは言っても、決して漠然たる感想や行動の羅列を企図したものではない。二日間の行程を回顧するわずかな前文にも、複数の資料が細部に駆使されているのであり、何の贅言を用いずとも、

橋の名を目白押しに並べれば、蘇州の水都としての風情が髣髴とするということが、谷崎には分かっていたのである。そこには、観光に必要な情報だけを手際よくまとめあげることは長けていても、現地の生活者が日常的に享受している町の魅力にはまるで無頓着なガイドブックのあり方に満足せず、その限界から外へ踏み出そうと試みる谷崎のさかんな意志を見ることが出来るだろう。

三

一体、谷崎にとって蘇州の魅力とは何だったのだろうか。「蘇州紀行」を特徴づけているのは、何よりも谷崎の「景色」に対する深い愛着である。二日目の市内遊覧を経て、(私は一体山国よりも水郷の景色を好むせるか、殊に町の中なぞを流れて居る河の景色を好むせるか、此の一日の遊びで、蘇州がすっかり気に入ってしまったのである)と谷崎は述べている。実際「蘇州紀行」では、景色の鑑賞に比して名所旧跡の建物に関する記述自体は極めて限定的である。この点は、当時の日本人の中国旅行記を並べてみたとき、谷崎の紀行文の異質性として特筆されるものである。

例えば、張継の「楓橋夜泊」で人口に膾炙した城外鉄鈴

関の寒山寺は、日本では『唐詩選』の流行によって幅広い層の読者が憧れを募らせてきた眷恋の地であった。しかし、民国初期になって蘇州を訪ね、寒山寺を実際に見た日本人旅客は、口を揃えて落胆を語っているのである。宇野哲人は、(若し夫れ楓橋夜泊の詩を誦すれば、孤舟蘆荻の間に泊し、烟波蒼茫たる彼方、鬱蒼たる森の間より、隠々たる鐘声の波を渡りて来れるかと想像せらるれども、河は蘇州より鎮江に通ずる幅員凡そ七八間の運河にして、寒山寺は橋を距ること四五町、熱鬧の巷に在る。詩の我を欺くこと何ぞ夫れ甚しき)〔支那文明記〕^③と述べており、徳富蘇峰は、(煉瓦の門柱、鉄の扉、其の俗悪は、曾遊の際の荒廢に比して、未だ甲乙如何を知らず)〔支那漫遊記〕^④とやはりこれも手厳しい。さらに谷崎より三年遅れてここを訪ねた芥川龍之介は、(本堂と云はず、鐘楼と云はず、悉紅殻を塗り立てた、俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち烏啼くどころの騒ぎぢやない)〔何でも程徳全が重修したのも、一つには日本人の参詣が多いから、日本に敬意を表する為に、一肌脱いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗悪にしたのは、日本人にも責はあるかも知れない)〔支那遊記〕^⑤と皮肉を放つ始末であった。

一九一一年(宣統三年)に江蘇巡撫の程徳全によって再建

された寒山寺の建物は、彼らが訪問した当時まだ真新しいものだった。再建の際、古典学者の兪樾が有名な「楓橋夜泊」の詩碑に新しく揮毫している。明の文徵明の筆になる以前の古碑は、太平天国の兵火にかかって割れていたのを、日本人が、面白半分^①に欠いて持ち帰ったので、今では、字も句も解らなくなつて居る（來馬琢道「蘇浙見學録」^②）というありさまだったらしい。これについてやはり芥川は、^③「欠いたのは誰だと云ふと、寒山寺を愛する日本人ださうだ」（『支那遊記』）と吐き捨てるように語っている。

詩文がもたらす美的空想を裏切られた日本旅客は、現実の寒山寺にしばしば「俗悪」という形容詞を投げつけた。しかし、「俗悪」と言われるほどキツチユな寒山寺の真新しさについて、谷崎は一向に気にする様子がない。〈徳富蘇峰氏を始めいろいろの人の紀行文や談話に依つて、寒山寺は詰らない所だと云ふことを度々聞かされて居たけれど、私は決して詰まらない所だとは思はなかつた。寒山寺その物は詰まらないにしても、あの附近の運河の景色——楓橋、鉄鈴関のあるあのあたりの風光を、私は未だに忘れることが出来ない〉。周囲の景色さえ良ければ、建物の失点など物の数ではないと言わんばかりの書き方をしているのである。

「景色」を重視する谷崎の旅は、いわゆる「観光」からの逸脱の可能性を孕んだ旅であった。〈実を云ふと、私は天平山の紅葉なんかはどうでもよい。寧ろ道中の運河の景色が目的なのである〉とあるように、谷崎にとつては名所旧跡を実見することよりも、遊覧のプロセス自体を愉しむことに意義があつたのである。そしてそれこそが、現地日本人の案内に対して、谷崎が憤懣を抱く大きな要因だつたとも言える。

宋の范仲淹の為に建てたといふ天平山白雲寺の白壁は、其れ等の楓樹の間に見え隠れして、山の麓を取り囲んで居る。しかし案内者の女将は、例に依つて其の寺には一顧も与へず、歩くより外に仕事はないと云つた風な様子で、傍目も振らずにどんどん山へ登り始める。

〈歩くより外に仕事はないと云つた風〉でという揶揄のなかには、名所に辿りつくことだけに囚われ、いつの間にかスケジュール消化を目的と勘違いしているツーリズムの弊害に対する警戒と反発とがあるのではないだろうか。

実は、月廼家の案内は、当時の日本旅客の誰もが不快を

感じるようなものではなかったらしい。〈蘇州には、まだ見るべき所も多数にあるやうであります。それは、『蘇州案内』と云ふ書籍もあり、又月の家の人にも案内して貰ふ方が宜しい〉(来馬琢道「蘇浙見学録」)と積極的に推奨する案内記すら存在しているのである。谷崎が宿の女将や番頭の案内に一々腹を立てたのも、名所観光をノルマのようにこなす団体客向けの案内に慣れきった彼らのやり方が、谷崎の求めるものと食い違っていたことに原因があるのだろう。谷崎はガイドブックと現地案内者の多大な恩恵にあずかりながらも、旅行者に表層的で一律の体験しかもたらさない形式化された「観光」の弊害に自覚的だったのだと言える。

四

ところで、「景色を見る」という感覚にも色々なレベルがある。一般に「見る」という行為は、「見る人」と「見られる物」との間に物理的・心理的な距離が存在しなければ成り立たない。また、「景色」という日本語も、美的鑑賞を前提とした自然の捉え方を指し、そこには人間の審美眼が介在している。このことは、例えば陶器の表面に巧まらずしてできた美しい表情を「景色」と呼ぶ場合があることを見て

も明らかである。

それにしても、谷崎が使う「景色」の語は特別で、「見られる物」を「見る人」(≡自分)から切り離し、向こうに置いてじっくり観察してやろうとするような主客分離の意識に乏しい。むしろ、「見る人」を「見られる物」の中に何とか吸収させてしまおうとする同化志向の方が強く表れている。

三日目の行楽についての谷崎の記述を見てみよう。盤門外の日本租界の岸を離れ、呉門橋をくぐって水門塘から西向きに水路を進み、天平山の山麓まで画舫を漕ぎ寄せる間、旅人は常に低い水際から、両岸に展開される庶民の生活風景を親しみをこめて眺めている。ふと舟の行く手に目を転じると、手前から奥へ同じ形の鼓橋が三つ続いている彼方に、盆石のように美しい山が秋の空に映え、水はその山の麓の灌木の中から流れてくるもののように見えた。谷崎はこれを目にする、これからまさに桃源郷のなかに足を踏み入れていくような陶酔感に一気に包まれてしまう。

此方から眺めると、林のあるあたりがいかに清い美しい仙境のやうに感ぜられる。お伽噺のお爺さんやお姫さんの住んでゐる村は、きつとあ、いふ所にあるの

ではないか知らん。さうして、桃太郎の桃の流れて来る川は、大方こんな川だつたらうなどと思ふ。殊にその川上を仙境らしく見せてゐるのは、林の後ろに聳えてゐる山の姿である。(中略)山の肌は全部水で洗つたやうなきれいな石から成り立つてゐて、それが広い広い野の中にたつた一つ、盆石の如くに置かれてゐるのである。それ等の川上の山や林が、飽く迄も透き徹つた秋の朝の空気の底に薄青く霞んでゐる情趣は真に何とも形容することが出来ない。

谷崎はこの記述を境に、今自分がいる運河をごく自然に「川」と呼び変えていく。現実には人工の水路でも、それを絵のような「景色」の中から流れ出ている清冽な「川」に見立てることで、舟の進行を「川上」への遡上として意味づけているのである。そして遠近感をともなう三つの橋もまた、自分の身が絵の中へと取り込まれていくというプロセスの設定に大きな効果を上げている。橋を一つくぐるごとに、美しい「景色」への同化が段階的に叶えられていくという、見事なイメージの操作が行われているのである。

谷崎がここで、「お伽噺」に言及している重要性について

注意しておきたい。野口武彦は、谷崎が中国を異郷よりも幼年時代に通じる世界として見ていたことについて指摘し、(エキゾチシズムとは、ひとくちに言えば未知の事物に対する憧憬である。谷崎はこの心情のエッセンスを自分自身の幼年期の体験にもとづいて「謎のやうな扉の向う」という美しい言葉で表現している。ひっそりと「謎のやうに侘びしく立つてゐる扉の向う」にはいったい何があるのか。これがすべてのエキゾチシズムの源泉にある好奇心であり、郷愁ノスタルジヤの感情である)と述べている。野崎歎もこれに言及しながら、(中国にまつわる作品のそこかしこに認められるのはまさに、子供としての旅人の肖像なのだ(中略)桃太郎の源流とは、ここに中国を「自己回帰」のステップにしようとする想像力の働きの確かだ^⑩)と指摘している。

注目したいのは、ここに指摘されるやうな「郷愁」や「自己回帰」を作品のなかで可能にしている言葉の操作である。(桃太郎の桃の流れて来る川は、大方こんな川だつたらう)(川上の仙境の方から、一艘の船がゆるゆると、桃が流れて来るやうにゆるゆると、櫓の音も立てずに此方へ漕いで来る)というこの「川」を遡ることは、桃から生まれた桃太郎の未生以前の世界を目指すことである。した

がって、舟の動きは過去への遡行を意味し、それに揺られて「川上」を指す「私」は、幼い頃へと向かって時間を巻き戻していく感覚に身を委ねていることになるだろう。天平山の白雲亭から西施の伝説が残る靈巖山を眺めたときも、(西施と云へば、歴史上の人物の名であるよりも、私には何だかお伽嚙の中に出て来るお姫様の名のやうな気がする。(中略) 其のお姫様の故郷がつい眼の前にあるのかと思ふと、日本歴史の古蹟を訪ねる場合とは違って、非常に遠い夢のやうに遥かであつたものが、急に近くへやつて来たやうに感ぜられる」と述べている。蘇州という「異郷」は、子供の頃に親しんだ「お伽嚙」の記憶を経由して、懐かしい「故郷」そのもののイメージとして捉え直されるのである。

「景色」との同化を渴望する谷崎の独特な心理の根柢には、幼児がえりへの甘い憧れを含んだ「望郷の念」が横たわっていることは疑い得ない。それは(父が病気に罹つたために騒々しい日本橋の家へ看病がてら来て居るので、到底落ち著いて原稿を書く事が出来ない)という現在の状態との対照を際立たせる。むしろそのような現実には背を向け、日本橋界隈の水辺を遊び場に呑気な時間を愉しめた子供時代の原風景を、中国旅行の記憶の上に幻視していると

見ることも可能であろう。

谷崎にとってこの旅は、例えば作中で『剪燈新話』の「聯芳樓記」にたびたび言及していることが示すように、漢詩漢文の教養によって培われた文人的関心を満足させるための名勝探訪の側面があることは否定できないが、それ以上に、中国の風土を故郷にも似た自身の原点として認識するということ、時間旅行としての象徴性を顕著に帯びたものだったと言えることができる。

五

さて、蘇州の「景色」に対する谷崎の同化願望を以上のように読み解いてみたとき、両者の融合を紙一重のところでは阻害している「言語の壁」の意味もまた際立って見えてくるのではなからうか。(川の景色を独りで心置きなく味ふ為めには、其の女将さへ余計な邪魔者であるやうな気がした。実際支那語が少しでも出来れば案内者の必要なか全くない)と最初から思っていた谷崎は、案内人の女将の中国人に対する蔑視的な態度に憤激し、作品の後半でこう述べている。

「日本人を儲けさせるのはようございませうが、支那人

に金をやるのは一文でも惜しうございますから。」／＼と、先刻駕籠昇きと談判する時に女将は云つた。私は其の言葉がひどく癩に触つた。そのくらゐ日本人同志の爲めを思ふなら、もつと宿屋の設備をよくして、少くとも支那の宿屋より居心地よく泊まれるやうにしてくれたらいい、ではないか。私の経験したところでは、言葉の不便さへなかつたら、支那人の旅館の方がどんなに経済で、どんなに親切で、而もどんなに清潔だか知れやしない。(中略)まさか支那に居る悉くの日本人が、「支那人に金をやるのは一文でも惜しい。」と云ふやうな、浅はかな了見でもあるまいけれど、折角遊びに来てでもさう云ふ野卑な同胞に遇ふ事は、あまりいゝ氣持がしない。

一方、この女将に面当てるつもりで二錢銅貨を与えた乞食が、さらにしつこく追いつがつて来たのを谷崎がうるさがる場面もある。谷崎はその乞食を(馬鹿!)と罵り、(二錢やつたら沢山ぢやないか)と、(思はず大声で怒鳴りつけた)という。中国人を軽んじる粗野な日本人への怒りと、中国の乞食に対する罵倒とは、一見すると谷崎の矛盾した両面のように見えるが、これはどう捉えたらよいのだ

らうか。

女将の通訳によれば、二錢銅貨では通用しないので、その乞食は一錢二枚に両替してほしいと嘆願していたのである。野崎欲は、乞食に対する谷崎の癩癩が、(もともとは日本人女将への怒りに根を持つもの)であり、(なまな中国語会話というレベルでは文字どおり「閉口」するほかないおのれの(インファンス)性自体にかんしゃくを起していると考えられる)と指摘している。確かに乞食に対する怒りの原因は、自分で中国語を使いこなして直接中国人と意思疎通を図ることができない歯がゆさにあるだろう。だとすれば、怒りの矛先は自身の幼児性というよりも言葉の壁それ自体に向けられているはずだ。女将を疎んじるのも乞食の要求に苛立つのも、煎じ詰めれば言葉の壁に阻害されることなく中国との同化を果たしたいという願望に根を持つことは明らかである。

総じて「蘇州紀行」には、中国語会話をまったく解し得ないことから来る隔靴搔痒の感が繰り返して述べられているが、それは自身が愛する中国の「景色」を、そこに生活する人の感覚に成り代わって享受したいとする越境と転生の願いを表現したものにはかならない。作品の結末には、そのような願望を凝縮した印象的な場面が登場する。何気な

い風景として描かれる次の二つの場面は、「見る」者でありながら「見られる」者としてついに「景色」のなかに溶け込んでしまうという、こよなく至福な仮想感覚を描き出したものでなくて何であらう。

橋の中央の、弓なりに反つて居る弧の頂辺に、日向ぼっこでもして居るのか、一人の人影が塔の如くちつと動かずにイんで居る。其れは黒縹子の服を着た通りかゝりの男が、私の船の近づいて来るのを待ち構へつゝ、欄干に凭れて川の面を瞰下して居るのであつた。

川筋の正面には又新たな鼓橋が、優しい姿をして我れ我れを迎へて居た。橋の頂上には、其処にも同じやうに人影がイんで居る。今度の男は片手に鳥籠を持つて、真赤な服を纏うた子供を従へて居るのである。

これまでの「私」は、町家の女房が〈汀の石段にしやがんでササラでお鉢を洗つたり菜を洗つたりして〉いたり、繫留した舟に〈洗濯をした着物が干して〉あつたり、別の舟には〈苦を懸けて、その上へ一杯に白菜をならべて〉い

たり、水の近くで一人の女が〈うづくまりながら竹籠を編んで〉いたりする沿岸の下町風景が移ろいゆく様子を、船の進行とともに余念なく視界に収めてきたのであつた。そのような「私」の姿を、気がつけば橋の上から塔のように佇む黒い人影が見下ろしていたのである。

「景色」に同化したいと願ひながらも、常に「見る」側にあつた「私」は、今ようやく「景色」の一部として「見られる」立場になつたのだと言える。傾き始めた日の逆光線を浴びながら、じつと舟に視線を送る橋の上の黒いシルエットは、おそらく美しい「景色」に包まれて営まれる蘇州の庶民生活の中に、存在をまるごと溶かし込んでしまいたいと願っている「私」自身¹⁰の分身として谷崎には感受されたのではなからうか。

従来、日本人作家によるこの時期の中国紀行文は、帝国主義勢力の圧迫下にある中国民衆の「現実」をどれだけ描けているかが主要な評価軸になつてきた。だが、一介の旅人に「現実認識」を求めても、そこから低評価しか出てこないことは目に見えている。「蘇州紀行」に顕著な谷崎の「同化願望」にしても、彼我の差を無視した他者性の欠如という見方をすれば、当然批判の対象となり得ることは言うまでもない¹¹。例えば西原大輔が、「オリエンタリズム」

は長い期間にわたって、ロマン派のエキゾティックな美術や文学、または東洋学を意味していたが、その後エドワード・サイードが「オリエントを支配し再構成し威圧するための「西洋の様式」^{スタイル}」であるという第二の定義を加えたことを紹介し、これをふまえて「中国への憧れを表明しつつ、一種の偏った見方で中国を語る谷崎の作品には、サイードの定義でいうところの「オリエンタリズム」の言説が、豊富に含まれている」と指摘したのも、批判的理解の一つの形であったと言える。

しかし、自分を蘇州の庶民生活の一点景として「景色」のなかに溶かし込もうと願うことは、日本人としての立場やアイデンティティーから切り離されたものとしての自己存在を、絶えず想定しつづけることに他ならない⁽¹⁾。そのような自己認識が、女将の言動に典型的に現れた当時の日本人の蔑視感情に対する激しい糾弾の力を生み出していることも見逃すべきではない。「異郷」に「故郷」を求める欲動が、「野卑な同胞」への批判を生み出すというこの機制については、その功罪を含めてもつと注目されてもよいのではないかと思われるのである。

付記 本稿は、二〇二三年一〇月二一日、蘇州大学で開催

された「強化国際伝播、講好蘇州故事」国際学術討論会にオンラインで参加し、「近代日本作家が見た蘇州―谷崎潤一郎「蘇州紀行」について―」のタイトルで行った報告内容にもとづくものである。谷崎潤一郎「蘇州紀行」からの引用は初出に拠り、漢字は常用漢字に改めた。引用文中には今日不適切とされる用語も見えるが、歴史資料としての価値を重んじて原文通りとしたことをおことわりしておきたい。なお、本稿は日本学術振興会科研費（基盤研究（C）23K00273）の助成による研究成果の一部である。

【注】

- (1) 伊藤貞五郎「最近の朝鮮及支那」（一九二一・七、神戸市会支那視察団）に、「月廻家は、上海月廻家主人の経営であったが主人歿後女将お繁さんが月廻家と分離し、自分の名前を其儘繁廻家に改めたのださうな。（中略）繁廻家は租借地の一隅にあり、周囲に樹木繁茂して隣家といへば領事館に警察署位だから恰で山奥の一軒家に入ったやうな淋しき。斯る異域に繊弱い女将の細腕で、当にならない同胞の旅客を心頼みに渡世する女将の胆力は有髯男子も尚且つ及ばない」（二三六―二三八頁）と紹介されている。

(2) 野崎欽「谷崎潤一郎と異国の言語」（二〇〇三・六、人文書

院)、六四頁。同書中、『朝鮮滿洲支那案内』の刊行年を(大正七年)(六二頁)と誤っていることが混乱の原因である。これはもちろん大正八年でなくてはならない。中公文庫版(二〇一五・四)で訂正されたが(六六・二七頁)、「蘇州紀行」発表時にも『支那案内』は未刊行で、谷崎は参照できなかった。

(3) 宇野哲人『支那文明記』(一九二二・二、大同館)、三二二頁。

(4) 徳富猪一郎『支那漫遊記』(一九一八・六、民友社)、二九七頁。

(5) 芥川龍之介『支那遊記』(一九二五年一月、改造社)、一六五―一六六頁。

(6) 来馬琢道『蘇浙見学録』(一九一三・九、鴻盟社)、五三頁。

(7) 芥川龍之介『支那遊記』、一六七頁。

(8) 来馬琢道『蘇浙見学録』、五六頁。

(9) 野口武彦『谷崎潤一郎論』(一九七三・八、中央公論社)、一四二頁。

(10) 野崎欽『谷崎潤一郎と異国の言語』、六六頁。

(11) 野崎欽『谷崎潤一郎と異国の言語』、六八―六九頁。

(12) 中国紀行における谷崎の分身願望は「西湖の月」の結末にも著しい。同作のこのテーマについて、宮内淳子は、(小姐の死は「私」の願望が生んだ、「私」の死の代替物なのである)と指摘している(「西湖の月」の改稿をめぐって――谷崎文学の一軌跡――)『国語と国文学』一九八五・一〇、六〇頁。

(13) 中国に対する自己投影のモチーフは、谷崎にも芥川にも共通するものとして指摘することができる。ただし、中国への同化を志す谷崎には憧れの要素が強いのに対して、中国を鏡と見なし、そこに日本の戯画を見出す芥川の場合は、自己嫌悪の意味での忌避感情が強く表れる傾向がある。

(14) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム――大正日本の中国幻想』(二〇〇三・七、中央公論新社)、一五頁。

(15) 天平山での昼食時を描く際に谷崎が、(かうして見ると日本の婦人も満更悪くはないと思つた)という感想を漏らしているのも、日本を外部から異化して眺める視線の一例として分析することが可能である。